

平成 19 年度「OB と語る会」講師リスト

【学部 3 年生対象】

日程	講師名	卒業年	勤務先
7 月 10 日 (火) 化学生命工学	郷本佳宏 氏	電化 S59 卒	日産自動車(株)
	末澤裕子 氏	応化 S50 卒	文部科学省
7 月 17 日 (火) 機能物質化学	秋山隆人 氏	物工 H14 卒	富士写真フィルム(株)
	高橋 淳 氏	物工 H03 卒	日本曹達(株)

【後半 (修士 1 年生対象)】

日程	講師名	卒業年	勤務先
11 月 20 日 (火) 先端物質・環情	小林 誠 氏	応化 S62 卒	(財)電力中央研究所
	稲葉吉尚 氏	電化 S49 卒	パナソニック EV エナジー(株)

『OB と語る会』に参加して

稲葉吉尚

(昭和 49 年電化卒, パナソニック EV エナジー(株)勤務)

「社会を知らない学生たちに、現実の会社社会の厳しさを話してくれないか!」、横山先生(大学院環境情報研究院, S49 年卒悪友仲間の中心人物!?) に、そう言って頼まれたのがきっかけで 2007 年 11 月 20 日母校において、大学院の学生さん約 20 名、指導の先生方数名とお話することが出来ました。

今回の私の取り留めのない話しが学生さん方にとって役に立つものだったかどうか、甚だ疑わしかったのですが、これから実社会に出ていろいろと新しいことに出くわした時に、「あの時、自分の親爺と同年代の先輩が、こんなこと言っていたなあ〜…」と、思い起こして頂くことでもあればと思っています。

卒業して 33 年、全てのことが時代と共に大きく変わり隔世の感がするとともに、私自身を振り返る良い機会ともなりました。

私が卒業したときには、現在の保土ヶ谷キャンパスは出来ておらず弘明寺校舎での卒業でしたし、当時は大学紛争の時代、卒業時には第 1 次オイルショックという時代にあって学生としての過ごし方も今とは大きく異なっていたような気がします。また当時は工学部では女子学生は皆無であったのに、今では多くの女子学生さん達が元気に活躍されている姿を拝見し、時代の移り変わりを更に強く感じた次第です。

今思えば世の中が大きく変わっていく変化点は、



著者近影

1997 年の COP3 京都会議の辺りにあったような気がします。私もそれまでの二十数年は、仕事として民生用小型二次電池の商品開発・品質管理を担当している中では、如何に電池使用機器の機能・性能の向上に寄与できるかメーカー間の熾烈な競争でしたが、これ以降この分野のハイブリッド電気自動車への展開を機に、環境性能の向上や需要拡大に対し環境に配慮した工場の建設など、「どういう商品を作るかをアピールする前に、どのように環境に配慮しているか」が重要な時代になっていることを痛感しています。とは言え、環境問題のハードルは極めて高く、根本解決のための手段もなかなか見つかっていないのも現実で、企業として軽々しく環境配慮をアピールすることは非常に難しいこととも思っています。

す。

このようなことも今回、学生さん方、先生方とお話しすることが出来ました。企業として目先の成果に走りがちである中、地球環境の保全という人類にとって21世紀の最大の課題にも挑戦して行かなくてはならないのですが、今回、この分野での母校の先駆的な取組みについても知ることが出来ましたし、卒業して33年を振り返るとともに、私自身が今後の人生をどう歩んで行くべきなのか、大いに考えさせて頂く機会にもなりました。

今後は母校の発展に微力ながらも協力させて頂くことが出来れば幸いです。



建設中の新本社工場（静岡県湖西市）

工場建設後の約2万坪の工場緑化に当っては、国大の鈴木副学長、藤原教授のご指導も頂きながら自然環境の復元に努めています。

「OBと語る会」の講師をつとめて

末澤裕子

（昭和50年2部応化卒，文部科学省初等中等教育局勤務）

昨年（平成19年）の7月に学部3年生を対象とした「OBと語る会」の講師をつとめました。私は現在、文部科学省のお役人となって4年目です。それまでの30年近くを母校、横国大工学部物質工学科、機器分析センターに所属し、研究やら学生の指導をしてきたわけです。今も「先生」と呼ばれてはおりますが、いわゆる「天下り」の逆「研究者下がり」の「センセイ」（調査官）として「日本の教育」に微力を注いでおります。

この会では来年卒論につき学生を相手にしているわけですから、「卒業研究」や「配属研究室の選び方」「研究室生活」について語ることが自分のこれまでの経験からいっても一番であろうと考えストーリーを組み立てました。自分の指導した学生の研究に対する意欲や研究生活及び研究室での態度などを紹介しながら、「研究室を選ぶにあたって」と「研究生活の驚きと心構え」などという立派な「まとめ」など作りレクチャーしたわけです。研究（室）は自分で決めること、それにあたっては、研究室の拘束時間や実験の難易、研究室の雰囲気を選ぶなど、と。また、研究意欲や研究能力はこれまでの自分の学業成績とは一致しないと励まし、目的意識を持って意

欲的に取り組めば伸びる、アタマよりカラダがよく働くうちに（大学時代）大いに「実験」をし、パソコンの前にすわって勉強しているふりをするな！と檄を飛ばしたわけです。

しかし、学生が聞いていたのかは甚だ疑問であります。その後行われた懇親会ではビールも出るといった国大化学会の心遣いにもかかわらず学生の出席者が少なく、残念でした。むしろ先輩である国大化学会の幹部の方々から私の講演に賛同をいただき、恐縮した次第です。「今の学生は」と多くの先輩方も感じておられることか、実験を頑張るよりバイトを頑張る学生がなんと多いことか（そんなに時間の使い方がうまくなったとは思えないが）と。私の学生時代は土日さえ大学に来たり、バイトから帰って再び大学に登校し夜中まで実験した学生はめずらしくなかったものです。これは大昔のことであっても、時代の流れとともに学生気質が変化していることは長年の教員生活から実感しておりますが、今でもいつまでも学生が大好きなこと、期待していることには変わりはありません。